

---

# ふんわりドルチェ

淡中海猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ふんわりドルチエ

### 【Nコード】

N9059X

### 【作者名】

淡中海猫

### 【あらすじ】

植物と会話ができる少年、ニフェル。その能力を活かし調合師となった彼は、幼い頃に幼馴染みとある約束をしていた。

『大きくなったら、絶対会いに行くよ』。八年前のシフォンケーキの味を頼りに、ニフェルは引越した幼馴染みを探しだす。

シフォンケーキで紡がれるハートウォーミングストーリー、ここに開幕！

草原に横たわる一人の少年。

さわさわと草が揺れる暖かな気候の中、少年は植物達との会話を楽しんでいた。

『ニフェルー！』

たたつと駆け寄ってくる少女。その手には、白い箱がある。

少年はよいしょと上体を起こした。そして、少女に向かって軽く手を挙げる。

『よっ』

『これねー、あたしが初めて自分で作ったんだよ！』

少女が差し出す白い箱を、少年は首を傾けながら受け取り、開けた。

『シフォンケーキ？』

中には真ん中に穴の空いた、直径三十センチ程のシフォンケーキが入っている。程よく焼き上げられた色に、甘い匂い。

見るからに、美味しそうだ。

『うん！ でもただのシフォンじゃなくてねー、それオレンジシフォンなのー！』

『……オレンジ？』

少年は何故か、眉を寄せた。しかし少女はそれに気付かず、得意気に話す。

『うん。オレンジジュースを入れてみたの』

『僕、甘い物に柑橘類が入ってるのはちょっと……』

少年は、洋菓子に柑橘が使われているのを好まない。それを、この少女も知っているはずだ。

これは嫌がらせだろうか、と真面目に考え出した少年に、少女は口を尖らす。

『そんなの知ってるもん！ いいから、食べてみてよ！ オレンジの味は全然しないから！』

『オレンジ味のしないオレンジシフォンって、それただのシフォンケーキじゃないか』

思ったことを素直に口にすると、少女は頬つぺたをハムスターのように膨らませた。

『もー、あー言えばこう言う！ いいから、とりあえず食べてよ！』

少女は箱に入った柔らかなシフォンケーキを手で鷲掴みにすると、少年の前に差し出す。

(自分で作ったケーキを、乱暴に扱うのってどうなんだろう)

少年は少女の手によって変形しているシフォンケーキを見て思ったが、それを口にすると少女がもっと怒ってしまうので、自らの胸

に留めておいた。

『食べるから落ち着けよ』

いいから食え、と少女はシフォンケーキを少年に押し付ける。

少年は強引な少女に苦笑しつつ、シフォンケーキを千切って口に運んだ。

『……美味しい』

ほんのりと甘く、ふんわりとした感触が美味しい。少女の言う通り、オレンジの味もしなかった。

『美味しいよ!』

『良かったー! オレンジは大丈夫?』

『うん。君の言った通り、全然味しない』

二口目を頬張ると、少女は得意気に胸を張る。

『ココアとか抹茶のシフォンでも良かったんだけどね、オレンジジュースをちよつと入れのが一番ふわふわになるからオレンジシフォンにしたんだ!』

『へー。本当美味しいよ』

三口目を口に入れる。

『ありがとう。この村を去る前に、ニフェルに食べて欲しかったん

だ。あたしのシフォン』

『……この村を去る?』

四口目を千切った手が、ピタリと止まる。

そんな話し、幼馴染みである少年は聞いていない。

『うん、今日の夕方に。だからこのシフォンは、ニフェルへの餞別なんだよ?』

『夕方って、もうすぐじゃないか！ 僕はそんな話し、聞いていない!』

少年が立ち上がると、少女は彼に無表情な顔を向ける。

『だって、言っていないから』

『言っていないって、どうして』

言ってくれないんだ。

そう続けたかった言葉は、少女の叫びにも似た声で遮られる。

『どうしてって、言ったら哀しくなるモン！ あたし、ニフェルと離れたくない。この村を出たくない!』

先程の無表情は、どうやら作り物だったらしい。今の少女は、ダムが決壊したかのように大粒の涙を流している。

『あた、っし！ ニフェルがっ……好き！ 離れたくないようッ!』

止め処なく溢れる涙と共に、少女は少年に対する想いを吐き出した。

『…………』

顔をくしゃくしゃにしながら涙を流す少女を、少年はぎゅっと抱きしめる。

『僕も、君が好きだよ。だから、泣かないで』

体を離し、少女の涙をそっと拭って、少年はニコツと笑みを浮かべた。

『大きくなったら、どこにいよう探しだして会いに行くよ。将来、おじさんみたいなパティシエになるんだろ？』

こくと、少女は頷く。

少女のお父さんは有名なパティシエで、遠くの街から買いに来る客も後を絶たない。

『だったら、僕はシフォンの美味しいパティシエを探すよ。それが君だって、信じてる』

『………… 本当に、探してくれる？』

潤んだ瞳で、少年を上目遣いで見る。少年はまたニコリと笑った。

『絶対探すよ。きっと会いに行くから、待ってて』

『……待ってる』

少女は少年の胸に、コッソリと額をぶつける。  
そんな二人を見守るように、草木がさわりと揺れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9059x/>

---

ふんわりドルチェ

2011年10月25日01時01分発行